ブダペスト通信

盛田　常夫

2025 年 No. 18（5 月 28 日）

大坂なおみの現在

全仏オープンで大坂は 1 回戦で、第 10 シードのバドーサに敗れた。昨年の大会でも、2 回戦で第 1 シードのシフォンテックと戦い、マッチポイントを握りながら敗退した。不得意な赤土コートで 2 年連続早期敗退である。

ランキング 50 位前後だと、トーナメントの早い段階でトップシード選手と当たる。40-50 位は中途半端な順位で、ここから脱してランキングを上げないと、四大大会の初戦から強豪との対戦になる。対戦相手にとっても、緒戦から大坂と当たるドローは嫌なものだ。50 位前後とはいえ、大坂はグランドスラム大会 4 勝を上げた実力者である。大坂の調子が良ければ、苦戦することは必至だからである。

この試合、大坂の緊張が解けてしまった第 2 セットを除けば、タイブレークを制した第 1 セット、最初にブレークして 3-0 の優位に立つはずだった第 3 セットは、ともに緊迫した接戦だった。第 3 セットの第 3 ゲーム目のサーヴィスを落としたことが、勝負を決めた。このゲームをきっちりとっておけば、勝利に近づいたはずだが、この後にもう一度サーヴィスゲームを失い万事休した。

負けたとはいえ、第 2 セットを除き、この試合のレベルは高かった。通常のトーナメントであれば、準決勝あるいは決勝のような試合だった。出産から復帰した大坂の状態は悪くはないが、コンスタントに力を発揮するには克服すべき課題が多い。

燃え尽き症候群からの脱出

試合を通して、どれほどインテンスィティを保てるかが、強豪同士の試合の行方を決める。バドーサもムラのあることで知られているが、この日は最終セットまでインテンスィティが落ちなかった。これにたいして、大坂はアップダウンが激しく、50 本を超えるアンフォーストエラーを記録した。バドーサのそれはおよそ半分である。肝心なところでの大坂のストロークミスの多さが、勝負を分けた。

驚いたことに、第 1 セットを終えたところで、大坂はメディカルタイムをとって、マニュキアが塗ってある長い爪を切り出した。爪が割れたのだろう。これには多くの TV 視聴者も驚いたはずだ。テニスプロが爪を伸ばしたままラケットを握り、最高峰の大会に出場するというのは信じられない。爪が長ければ、グリップをしっかり掴むことができないはずだ。今までもそうしていたのかもしれないが、グリップを

しっかり握ることができれば、パワーやストロークの精度が上がるはずなのに。大坂にはこういうテニスのディテイルへの拘りが見られない。

ド派手な衣装や髪型も、これを準備し体に付けるのに、かなりの時間がかかっているはずだ。その時間をウォームアップに使ったらどうかと考えるのがふつうだが、大坂はそうは考えない。この点で、すべてを野球中心に考える大谷翔平と大違いだ。

若くしてグランドスラム大会を 4 度も制した大坂はテニスに打ち込む意味を失った。いわゆる燃え尽き症候群である。これは女子選手に見られる特徴である。男子の場合、17－18 歳で世界のトップに立つことはほぼ不可能だが、女子の世界では稀なことではない。少女時代の成功がその後の選手の人生を狂わす事例は少なくない。20 歳そこそこで世界の頂点に立った大坂がトップを維持する重圧から逃れる道を探したとしても不思議ではない。

2022 年の全豪オープンを制したバーティも、ジュニア時代に同じ問題を抱えていた。その後、再びテニス界に復帰して、グランドスラム大会 3 勝目を記録した 2 か月後（2022 年 3 月）、バーティは 27 歳になる直前に、突然、引退を発表した。世界ランク 1 位のままテニス界を去るという衝撃的な出来事だった。「テニスで出来ることはやった。これからはテニス一本の生活ではなく、もっといろいろなことを経験したみたい」という意欲が、電撃的な引退となった。

大坂とバーティはほぼ同世代の選手である。休養、出産を経て、テニストーナメントに戻ってきた大坂のテニスとの向き合い方は大きく変わった。

大坂は引退ではなく、休養・出産を選んだが、復帰後はテニスを楽しむように心掛けているようだ。ランキング下位の選手と違い、大坂が生活のために賞金を稼ぐ必要はない。大坂には金銭ではなく、テニスを続ける意味が必要なのだ。ド派手な衣装や手の込んだ髪型は、テニスコート上での自己表現であり、今の大坂がテニスに打ち込むためのルーティーンなのだ。ツアーに子供を同伴し、子育てを堪能しながらテニスをすることが、今の大坂の生活になっている。

そうはいっても、負けず嫌いの大坂だから、1 回戦での敗退は辛い。敗戦後の記者会見で涙を見せたのは、まだ勝ちたいという意欲があるからだろう。現在の状態でも、トップシードと対等に戦う力はあるが、トーナメント勝ち進むためには克服すべき課題は多い。

大坂なおみに欠けているもの

大坂がグランドスラム大会を制した頃は、大坂のパワー（サーヴ力、ストローク力）が際立っていた。ところが、ここ数年、パワープレーヤーが増えている。180km/h のサーヴを打つ選手は珍しくない。力のあるストロークを打つ選手はもっと多い。164cm の小柄なパオリーニはサーヴこそ 150-160km/h 台だが、ストロークにパワーがあり、ボールを深く打てる。とくに、赤土のコートでは、パワーが土に吸収されるので、パワーに頼る選手のほとんどが苦戦する。ストローク力と足の速さが赤土を制する 2 大要因である。まさにパオリーニの活躍はそれを教えている。小柄な日本人選手が参考にすべきモデルである。

今年、大坂がパオリーニと初めて対戦して、そのストローク力に舌を巻いた。大坂のパワーショットを、カウンターでエースを取れるほどのパワーショットを打つことができる。バドーサは身長が 180cm で大阪とほぼ同じである。180km/h 前後のサーヴを打ち、ストロークも力強い。大坂のパワーと変わらない。もう現在の女子テニス界では、大坂が持ち前のパワーで相手をねじ伏せることができなくなっている。この新しい状況で、大坂が大きなトーナメントを勝ち進むためには、パワー以外の部分での進化が必要になる。

すでに大坂のサーヴは進化している。以前のようにサーヴィスエースを取るような強打一本槍ではなく、コントロールサーヴに心掛け、速度は遅いが、アウトサイドに切れるサーヴを多用している。これはガウフも同じで、以前のように 190km/h のサーヴを打って一か八かのパワー勝負にでるのではなく、大坂と同様に、コントロールサーヴに努めている（ガウフはサーヴの自信を失い、ダブルフォールトが多くなっているが）。さらに、大阪の弱点の一つだったセカンドサーヴが改善されている。以前の大坂はファーストサーヴこそ飛びぬけていたが、セカンドサーヴになると並みの選手のように 120-130km/h に急減速した。だから、セカンドサーヴを叩くことが、大坂攻略の一つの方法だった。復帰後の大坂のセカンドサーヴはスピードも球種も改善され、対バドーサ戦では 140-150km/h 台にスピードを上げていた。また、回転をかけ、高く跳ねるサーヴを打つようになった。ここは進歩しているところだ。

さらに、赤土コートでの足の運びが良くなっている。大坂はとくに足が速い方ではないが、以前とは違い、赤土でも勤勉にボールを追うようになっている。ただ、

ネット近くに落とされるボールを拾いに行く足が遅い。この前に出る足の動きはこれまでと同様に悪い。

大坂はネットプレーが苦手だ。これはバックハンドのスライスを打てないことと共通している。スライスが苦手だから、ネットでも片手のバックヴォレーが打てない。この点は今も改善されていないが、対バドーサ戦ではネットに出て両手のバックハンドヴォレーを何度か決めていた。鋭く決めていたから、これからの武器になるはずである。

また、ラケットを伸ばす必要のある受け身になったボール処理にたいして、これまでは無理にドライヴで返球しようとしてネットにかけることが多かった。バドーサ戦ではラケット面をフラットに作って、球を浮かせずに返す技術を披露していた。まだまだ改良の余地はあるが、ストローク戦で受け身に立った時のボール処理の技術は、かんたんに相手にチャンスを与えないために重要である。ラケットを大振りしないで、面を合わせるだけで返球する技術は、サーヴを受ける場合にも重要な武器になる。

大坂にとって最大の弱点は、ストロークで受け身になった時に、スライスで窮地を凌ぐ技術だ。対バドーサ戦でも大坂はバックのスライスを打つことはなかった。この点は依然として、コーチからの指示がないか、本人が嫌っているかのどちらかだろう。あのパワーテニス一本槍のサバレンカですら、押し込まれた時にスライスで球を繋ぐのに、大坂がその技術を持たないのは不思議でならない。相手がストローク戦で押し込んできた時に、スライスで散らし、プレーの間（ま）を取り、プレーを落ち着かせることが不可欠だが、大坂にはその技術がない。

大坂がもっと安定してトップシードと対戦するためには、これらの課題の克服が必要である。フィテッセの後を請け負った新しいコーチのムラトグルーが、これらの課題を大坂にどう言い含めるのかが、腕の見せ所である。